

12. もし、あなたの同胞、ヘブル人の男あるいは女が、あなたのところに売られてきて六年間あなたに仕えたなら、七年目にはあなたは彼を自由の身にしてやらなければならない。
13. 彼を自由の身にしてやるときは、何も持たせずに去らせてはならない。
14. 必ず、あなたの羊の群れと打ち場と酒ぶねのうちから取って、彼にあてがってやらなければならない。あなたの神、主があなたに祝福として与えられたものを、彼に与えなければならない。
15. あなたは、エジプトの地で奴隷であったあなたを、あなたの神、主が贖い出されたことを覚えていなさい。それゆえ、私は、きょう、この戒めをあなたに命じる。
16. その者が、あなたとあなたの家族を愛し、あなたのもとにいてしあわせなので、「あなたのところから出て行きたくありません。」と言うなら、
17. あなたは、きりを取って、彼の耳を戸に刺し通しなさい。彼はいつまでもあなたの奴隷となる。女奴隷にも同じようにしなければならない。
18. 彼を自由の身にしてやるときには、きびしくしてはならない。彼は六年間、雇い人の賃金の二倍分あなたに仕えたからである。あなたの神、主は、あなたのなすすべてのことにおいて、あなたを祝福してくださる。
19. あなたの牛の群れや羊の群れに生まれた雄の初子はみな、あなたの神、主にささげなければならない。牛の初子を使って働いてはならない。羊の初子の毛を刈ってはならない。
20. 主が選ぶ場所で、あなたは家族とともに、毎年、あなたの神、主の前で、それを食べなければならない。
21. もし、それに欠陥があれば、足なえか盲目など、何でもひどい欠陥があれば、あなたの神、主にそれをいけにえとしてささげてはならない。
22. あなたの町囲みのうちでそれを食べなければならない。汚れた人もきよい人も、かもしかや、鹿と同じように、それを食べることができる。
23. ただし、その血を食べてはならない。それを地面に水のように注ぎ出さなければならない。

説教

申命記 15 章は、七年ごとの安息年についての教えです。前半で七年ごとに貧しい者への負債を免除するよう教えられた後、後半では七年ごとに奴隷を解放するよう教えられます。「もし、あなたの同胞、ヘブル人の男あるいは女が、あなたのところに売られてきて六年間あなたに仕えたなら、七年目にはあなたは彼を自由の身にしてやらなければならない。」(12)

同じ同胞の「ヘブル人の男あるいは女」が「あなたのところに売られてきて」とあります。お金が無くなり、貧しくなって、食べるのにも困れば借金することになりますが、その借金も返すことができないとなれば、最後は身売りをしなければならなくなります。それでも食べられないまま死ぬよりはましだということでそうするのですが、我が子を「奴隷」として売らねばならない悲しさは何より悲惨です。でも、こうしたどん底の貧しさにある者にも、神の憐れみの手は伸べられていました。それがこの律法です。貧しくて身売りされてきた「奴隷」について、「七年目にはあなたは彼を自由の身にしてやらなければならない」と言うのです。つまり、貧しくて奴隷として身売りされても、売られた先に奉公するのは最長でも六年間であって、七年目には主人は必ずその奴隷を解放しなければ

なりませんでした。

これは、先の借金免除の律法と同様、神こそがイスラエルの真の主人であり、富と人との究極の所有者であることを教えるものです。たとえ貧しくて借金をし、身売りをすることになったとしても、金ある者が金なき者を永久に所有し支配することがあってはならないのです。なぜなら、神こそが人間の造り主だからです。人は、誰のものでもない、神のものなのです。神が人を造りました。そして生かしてくださっています。どんなに貧しくても、自由に生きる権利があります。貧しいからといって、人が人を隷属させるということがあってはならないのです。奴隷といえども人格があります。人としての人格を持っています。神が、人格ある一人の尊い人間としてこの世に造られました。ですから、物ではなく、人として扱わなければなりません。

「六年間」ということですから、「奴隷」といっても実質は雇用関係、雇用契約です。事実、レビ記 25 章 39-40 節では「奴隷として」ではなく「住み込みの雇い人として」扱えと言われています。それで、奴隷が六年間の奉公を終えて退職？する際には退職金まで支払うよう命じられるのです。「彼を自由の身にしてやるときは、何も持たせずに去らせてはならない。必ず、あなたの羊の群れと打ち場と酒ぶねのうちから取って、彼にあてがってやらなければならない。あなたの神、主があなたに祝福として与えられたものを、彼に与えなければならない。」(13-14) これによれば、奴隷だからといって馬鹿にして何も与えずに手ぶらで去らせるようなことがあってはならず、「あなたの神、主があなたに祝福として与えられたもの」の中から、これから新しい生活をしていく上で必要な物を十分に与えなければなりません。

とは言え、貧しい人への貸し惜しみの場合もそうでしたが、これから自分のもとを去る奴隷に対して、主人がケチって退職金を出し渋るということも十分に考えられます。それで、モーセは 18 節で次のように忠告します。「彼を自由の身にしてやるときには、きびしくしてはならない」。そして、その理由として「彼は六年間、雇い人の賃金の二倍分あなたに仕えたから」と言われるのです(18)。通常の雇用契約は三年でした(伊 16:14)。その倍の六年も仕えたのだからと、正当な報酬を支払うよう命じるのです。

退職金を出し渋ることがないように、こうも言われます。「あなたは、エジプトの地で奴隷であったあなたを、あなたの神、主が贖い出されたことを覚えていなさい。それゆえ、私は今日この戒めをあなたに命じる。」(15) 今は豊かになって、人に借金するどころか、むしろ人に金を貸し、奴隷まで抱えるほどになったのですが、もともと奴隷の主人も、かつてはエジプトで「奴隷」でした。誰よりも奴隷のつらさを知っています。奴隷の気持ちがわかります。そして神は、彼を憐れんで、エジプトの苦しい奴隷生活から救い出してくださったのです。それで、モーセは、自分が受けた恩を忘れず「覚えていなさい」と命じます。そして、自分が受けた恩を今度は自分の奴隷に施すよう「命じる」のです。

これはこの 15 章全体の精神と言えます。15 章で、神はイスラエルの最も貧しい者である負債者と奴隷の解放を命じるのですが、そもそも神は、イスラエルの全員をエジプトから救い出されたのであって、その結果、その中から経済的に豊かな者も登場することになるのですが、実は、神の前には豊かな者も貧しい者も変わりありません。豊かな者として神の恵みによってそうなれただけの話であって、神の恵みがなければ、彼らもまた貧しい奴隷のままでした。つまり、イスラエルの豊かさは「主があなたに祝福として与えられたもの」なのです。それで、神の民イスラエルは、自分が神から受けた恵みに感謝して貧しい者に施します。七年ごとに借金を免除し、奴隷を解放し、出て行く奴隷に手厚く退職金を出すのです。

ただし、解放されるかどうかは奴隷の意志にも関わります。奴隷自身が主人と一緒にいて「しあわせなので」主人から離れたくないという場合もあります。その際には、その家の戸に奴隷の耳をきりで刺し通して打ち付けることでその後もその家に仕えることができました。「その者が、あなたとあなたの家族を愛し、あなたのもとにいて

しあわせなので、『あなたのところから出て行きたくありません。』と言うなら、あなたは、きりを取って、彼の耳を戸に刺し通しなさい。彼はいつまでもあなたの奴隷となる。女奴隷にも同じようにしなければならない。」

(16-17) 「奴隷」といっても、その「奴隷」自身が特殊な技能や能力を身につけている場合もあり、あるいは、息子イサクの嫁を探しに遣わされたアブラハムのしもベエリエゼルのように、奴隷が一家の中で重要な立場にあることもありました。それで、きりで耳に穴を開けることで、「いつまでも」主人の奴隷でいることができました。「聞き従う」従順の象徴である「耳」を主人がきりで戸に打ち付けて刺し通すことで、奴隷はその家への忠誠を誓うのでした(詩篇 40:6)。

19 節からは「初子」のささげ物について教えられます。14 章後半では畑の収穫の「十分の一」のささげ物について教えられましたが、15 章では牛や羊の「初子」を神にささげることが教えられます(19)。家畜の中で一番初めに生まれた「初子」は、神にささげる神聖なものとして、毛を刈ったり耕作に使ったりせずにつまみかきでそのまま神にささげます(19)。しかも、市場価格の安い「欠陥」のあるものは、神にささげてはなりません(21)。

借金免除と奴隷解放の命令が、14 章後半の「穀物の十分の一のささげ物」の命令と、15 章最後の「初子のささげ物」についての命令にちょうど挟まれる形で位置していることに注目しなければなりません。穀物の「十分の一」も動物の「初子」も、神が豊かに恵んでくださった感謝として、穀物なら「十分の一」を、動物なら「初子」を神にささげるというものです。そして、その感謝のいけにえをささげるよう命じられる律法のど真ん中に、借金免除と奴隷解放が命じられます。その借金免除と奴隷解放の命令の精神は、かつて自分がエジプトで奴隷であったことを思い出し、そこから神が救い出してくださったことを感謝せよというものでした。つまり、ここでは、日々の糧を神が与えて生かしてくださるという私たちの「いのちの恵み」が教えられていると同時に、その中心に位置する形で、エジプトの奴隷生活からの解放という「救いの恵み」が教えられています。

つまり、人の借金を免除し、奴隷を解放することも、神の恵みなのです。それは、もったいないとか惜しむべき損失なのではなく、神の祝福なのです。なぜなら、そうできるほど神が豊かに恵んでくださったからです。そうでなければ立場が逆になるところです。貧しくて人の奴隷になります。ですから、借金を免除し、奴隷を解放してあげられるほど豊かになったことを心から感謝して、イスラエルは、「十分の一」と「初子」を神にささげ、借金を免除し、奴隷を解放するのです。